

近代旅行者の地図と想像力

—土産物としての奈良絵図をてがかりに—

京都大学大学院 堂本直貴

1 目的

本報告の目的は、観光地で販売された、絵図あるいは地図を導き手にして、当該娯楽地・景勝地が、公園という西洋的な都市計画概念によって変化するなかで、その関係者や利用者といった人々が、場所／空間の変化をどのように受けとめたのかを明らかにし、地方都市に流入したモダンティの一端を考察するというものである。

2 方法

本報告では、分析対象として奈良大学総合研究所（2002）が編集した『奈良大仏前絵図屋筒井家刻成絵図集成』に掲載された名所絵図（掲載図の制作期間が江戸時代後期から明治時代中期に集中、以下「奈良絵図」）を根拠として、制作者・利用者の存在を意識しつつ、その描画形態や内容の変化を読み取っていく。採用史料は、絵図であると同時に地図の側面もあわせもっている。社会学における地図一般の理論的考察としては、若林幹夫（1995）の研究があげられる。分析では、この知見も参照しつつ、絵図あるいは地図が、読む者にあたえる想像力の変化を考察するという方法をとる。

3 結果

近世以来の奈良絵図の特徴は、二次元で描かれた東大寺大仏殿を中心にして、左右に配置された建物が三次元化しているという構図を取り、全体に地図（平面図）に近い。この形式は近代（明治以降）も継承され、1880年の奈良公園指定後、新設された国立博物館や県庁を絵図に追加したほかは、ほぼ変わらない状態で観光客に提供されている。方角や距離感においては実際と異なり、精確な地図（平面図）としての利用は不可能である。三木理史（2002）が指摘したように、遊覧時の携帯利用という実用よりも、土産物として帰宅後に回覧する目的で供給されたのが事実であろう。

しかし、近代に入ると、旅行者は精確な地図（平面図）の入手が容易になり、制作者は、いかにして、従来の様式に付加情報をつけるかが課題となった。その結果、精確な地図（平面図）に一部、三次元化情報を加えるか、鳥瞰図を新たに作成する、あるいは多色化するという方法がとられる。

4 結論

本報告は、権力者側の一つの道具である地図が、一般大衆に普及することによって発生した変化を端的にあらわす。すなわち、地図の入手が一般的でなかった時代には、情報が曖昧で実用に耐えられなくても、旅行の記憶を想起するという点で意味があった絵図という「作品」は、地図の入手が容易になることによって、実用的な「情報」のうえに、記憶を想起するという形式を要求するようになる。その変化が近代という時代に発生したことは象徴的である。同時に、歴史的・文化的重層性をもつ奈良公園イメージの変容も促したのである。

文献

若林幹夫, 1995『地図の想像力』講談社。

三木理史, 2002「奈良絵図屋作成地図の地理学的研究」, 奈良大学総合研究所（編）『大和・奈良地域の観光に関する学術的研究—伝統と課題—』奈良大学総合研究所特別研究成果報告書。

奈良大学総合研究所, 2002『奈良大仏前絵図屋筒井家刻成絵図集成』奈良大学総合研究所。